

3. 先行研究

3.1. 与那国方言のアクセント体系

与那国方言が三型アクセント体系であることは平山・中本 (1964) で明らかにされている。本発表では上野 (2010a) などの一連の先行研究に従い、A 型、B 型、C 型のラベルを与える。A 型は概ね高平調、B 型は概ね低平調で、C 型は A 型に似るが後続するアクセント単位を下げる。(1) に上野 (2010b) による音調型一覧を挙げる。

(1)	A	ˈna: 《名》	haˈc'i 《橋》	taˈt'ami 《豊》	haˈnaburu 《鼻》
	B	ˌki: 《木》	ˌhana 《花》	ˌtagara 《宝》	ˌhurusat'a 《黒砂糖》
	C	ˈwa!: 《豚》	haˈc'iː 《箸》	haˈt'anaː 《刀》	kuˈrisat'aː 《氷砂糖》

表記は本発表の方式に改めた。C 型の文節末の下降はˈwa!: 《豚》のように重音節終わりでは音節内に下がり目が生じるが、軽音節では大まかな世代差があり、haˈc'iː 《箸》のように拍内下降として実現する場合と haˈc'i 《箸》のように実現しない場合がある。上野 (2010a) に従い、A 型に/=、B 型に/_、C 型に/]の記号をアクセント単位の末尾に付ける。

3.2. 複合語のアクセント

与那国方言の複合語アクセントについては上野 (2014, 2015) に詳しく記述されている。上野 (2014) によれば、与那国方言の複合語アクセントでは、(2) のようにいわゆる前部要素の「式保存」は成り立たない。

(2)	sagi= 《酒》 (A)	sagikubiN] 《酒瓶》 (C), sagikami] 《酒甕》 (C)
	guma] 《胡麻》 (C)	guma'aNda_ 《胡麻油》 (B)
	Ndai] 《左》 (C)	NdaikaNna_ 《左腕》 (B), NdaimiNjui_ 《左回り》 (B)

また、(3) のようにアクセント単位が 1 つにまとまらない 2 単位形も観察される。

(3)	aga]'agidaN_ 《赤とんぼ》,	ic'i]'uc'i] 《石臼》,	c'uri]hagu= 《薬箱》,	sat'a]'adi= 《砂糖味》
-----	----------------------	-------------------	-------------------	-------------------

上野 (2015) は 2 単位形が (4) のように生産的に見られることを報告している。

(4)	a'omori=keN= 《青森県》,	jamagata_keN= 《山形県》,	akita]keN= 《秋田県》
-----	---------------------	----------------------	------------------

ただし、「単純な各要素【=A 型、B 型、C 型。発表者補注】の組み合わせでは処理できない例がある」(上野 2015: 169) と述べる。また、後部要素の型が単独形と一致せず、「後部要素の型認定を保留したものも一部ある」(上野 2014: 71) とする。

以上のように、与那国方言は基本的に三型アクセント体系であるものの、複合語の一部に A 型、B 型、C 型の 3 つの型で解釈できるか不明な点を残している。

4. 本発表の調査と結果

前節で述べた先行研究の状況を踏まえ、与那国方言の複合語のアクセント体系を明らかにすべく、複合語を中心としたアクセントの調査を行った。

4.1. 調査内容

2017年～2018年に発表者による与那国島での現地調査を行った。本発表の分析に用いるデータは次の2名の話者から得られたものである。

- (5) 話者 A 米城 恵 (よねしろ めぐむ) 1941 年生まれ男性
 話者 B 崎原 用能 (さきはら ようのう) 1947 年生まれ男性

調査は発表者が作成した調査票に基づく面接調査で、1対1での読み上げ形式で行い、かつPCMレコーダー(Olympus製)で録音した。調査内容は、複合名詞を中心に、複合語の構成要素である単純語、複合動詞、単純動詞、およびそれらを用いた短文などである。

4.2. 調査結果

単純語を調査した結果、両話者とも先行研究と同様のA型、B型、C型の三型アクセントを保持しており、A型は下がり目がなく、B型は低平調、C型は文節末に下がり目がある。

- (6) ta'gi 《竹》(A) ɿmami 《豆》(B) su'riɿ 《皿》(C)
 ta'giN a'N 《竹もある》 ɿmamiN ɿa'N 《豆もある》 su'ri'N ɿa'N 《皿もある》

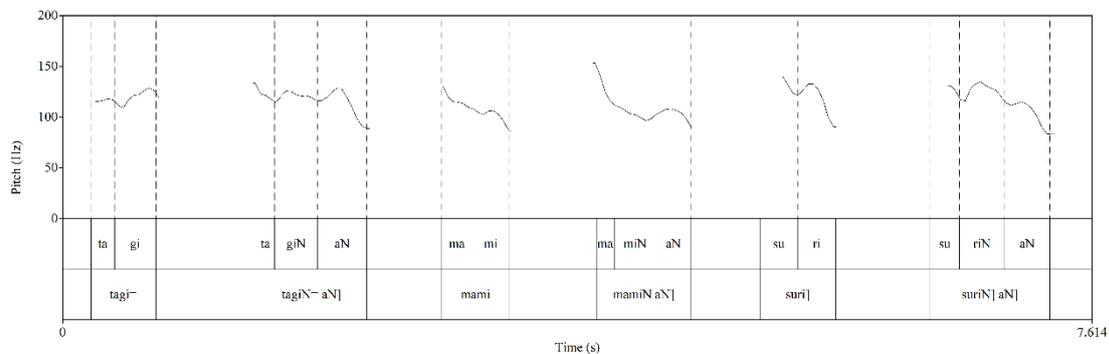


図 3: 単純名詞のピッチ曲線 (tagi= 《竹》, mami 《豆》, suri) 《皿》)

特に話者 A の場合、C 型が軽音節で終わる場合にもしばしば下降調が現れた。ただし義務的ではなく、逆に重音節終わりでも下降が現れないこともあり、C 型の下降調の実現は随意的になっていると言える。

複合語では、先行研究が指摘するように (7) のような 2 単位形が観察された。

- (7) c'u'ri'ha'gu 《薬箱》(C+A), N'su'ka'mi 《味噌甕》(C+C), si'ru'Nna 《お産の縄》(C+B)
 c'u'ri'ha'guba'gi'N a'N 《薬箱まである》, N'su'kamiba'gi'N ɿa'N 《味噌甕まである》

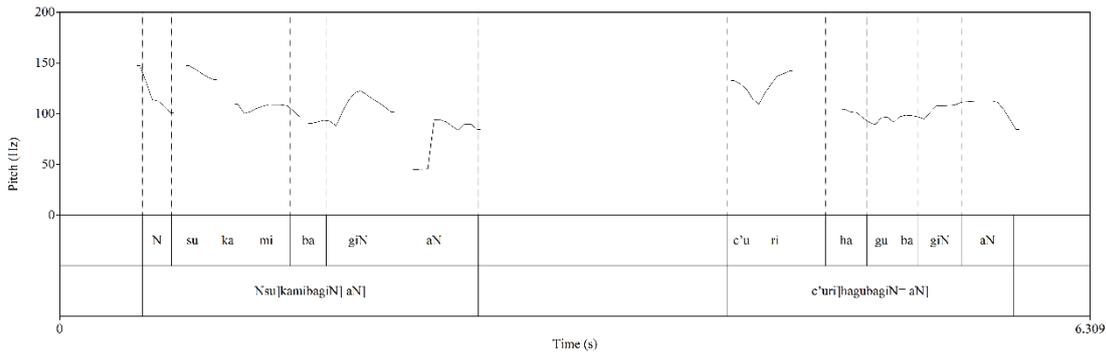


図 4: 複合名詞のピッチ曲線 (Nsu]kami] 《味噌羹》, c'uri]hagu= 《薬箱》)

(7) はそれぞれ c'uri]hagu= 《薬箱》, Nsu]kami] 《味噌羹》, siru]Nna_ 《お産の縄》と解釈される。これらの2単位形は発表者の調査した範囲では前部要素がC型の場合のみ見られる。

これに加えて、前部要素がC型の複合語の場合、後部要素が元のアクセント型にかかわらず低平調になる例が見られた。

(8) ha'c'i'hagu 《箸箱》, N'su'kudi 《味噌麴》, u'bu'ni'hat'agi 《大根畑》

これらは事実上 siru]Nna_ 《お産の縄》のようなB+C型と同じように実現するが、各要素のアクセントの単純な組み合わせではなくなっている (hagu 《箱》(A), kudi 《麴》(C))。

5. 考察

前節の調査結果を踏まえ、複合語アクセントを基にアクセントの音韻解釈を試みる。

5.1. 「空の」アクセント単位 X

複合語アクセントは、先行研究でも本研究の調査結果でも示されたように、A, B, Cの3型以外に2単位形も現れ((3), (4), (7)), さらに構成要素のアクセント型を保持しないC+B型相当のアクセント型も見られる((8))。

問題となるのは構成要素のアクセント型を保持しない(8)のアクセント型である。C+A, C+CがC+B型として実現するような音調交替は不自然である。(8)の後部要素の低平調は、B型としての積極的な実現ではなく、後部要素自体は固有のアクセント型を有さず、前部要素のC型の下降による消極的な実現と考える。このような前部要素のピッチに依存する「空の」アクセント単位を仮にX型と表すことにすると、

(9) o' o... o' +_l o... o (C+B) ≈ o' o... o' +_o... o (C+X)

のように、実質的にC+B型とC+X型は同一の音調となる。(8)はC+A, C+C → C+Xと後部要素が固有のアクセントを失った形と分析できる。同様にC+B → C+Xも考えられるが、両者の音調に(ほとんど)違いがなく事実上区別できない。

5.2. 複合語アクセントの音韻解釈

「空の」アクセント単位 X を仮定することで、複合語アクセントの音韻解釈に変更が必要かを検討する。

先行研究が指摘するように、与那国方言ではいわゆる前部要素の「式保存」は成り立たない（(2) 参照）。2 要素から成る複合名詞のアクセントを、先行研究及び本研究の調査によってまとめると表 1 のようになる。

表 1: 2 要素から成る複合語アクセント

前部要素\後部要素	A 型	B 型	C 型
A 型	A	A	C, A, B
B 型	B	B	B
C 型	C+A, C+X, B	C+B, B	C+C, C+X, B

B 型が前部要素の場合、複合語のアクセントも B 型になる強い傾向がある⁴。前部要素が A 型の場合も全体が A 型で実現する傾向があるが、A+C では全体が C 型になる例も多い。しかし、 $\circ^{\circ}\dots\circ-\circ-\dots\circ^{\circ}$ (C)は $\circ^{\circ}\dots\circ+\circ-\dots\circ^{\circ}$ の A+C とも解釈できる。A+C における C 型を A+C 型と解釈しなおすと、前部要素が C 型以外の 2 単位形も認めることになる。(10) のように、A 型は A+X 型か A+A 型、B 型は B+X 型か B+B 型とも解釈できる。

$$(10) \quad \circ^{\circ}\dots\circ-\circ-\dots\circ^{\circ} (A) \approx \circ^{\circ}\dots\circ+\circ-\dots\circ^{\circ} (A+X) \approx \circ^{\circ}\dots\circ+\circ^{\circ}\dots\circ (A+A)$$

$$\circ^{\circ}\dots\circ-\circ-\dots\circ^{\circ} (B) \approx \circ^{\circ}\dots\circ+\circ-\dots\circ^{\circ} (B+X) \approx \circ^{\circ}\dots\circ+\circ^{\circ}\dots\circ (B+B)$$

複合語アクセントを積極的に 2 単位形で解釈すると、表 2 のように整理できる。

表 2: 2 単位形で解釈した複合語アクセント⁵

前部要素\後部要素	A 型	B 型	C 型
A 型	A+A ~ A+X	(A+B), A+X	A+C, A+X, B+X
B 型	B+X	B+X	B+X
C 型	C+A, C+X, B+X	C+B ~ C+X, B+X	C+C, C+X, B+X

※ ~ はどちらの解釈を採るか決定できないことを意味する。

2 単位形を広く認める立場では、複合語アクセントは次のようにまとめられる：(α) 各音調の単純な組み合わせ (T₁+T₂) → (β) 後部要素が固有のアクセント型を失う (T₁+X) → (γ) 前部要素 (or 複合語全体) が B 型になる (B+X)。ただし、A+A の場合のみ実質的には (α) に留まり、(β) の A+X と解釈し得るとしても、(γ) の段階にはならない。

⁴ 例外は *tanimai* 《種稔》 (< *tani* 《種》 + *mai* 《米》) など少数である。

⁵ A+B はほぼ規則的に A 型になるが、*mai'tara* 《米俵》, *sa'gi'kac'i* 《酒粕》など A+B 型と見なせるものもあるため、ここでは A+A 型 (A+X 型と区別できず)、A+C 型にならない A+B 型を認めた。B+A 型、B+C 型が見られないため、B+B 型は (B+X 型と区別できないが) 可能性としてはあり得るものの認めなかった。

5.3. B型と有核型

A+Aの場合を除き、複合語アクセントは全体がB型(B+X型)になる傾向がある。A型は高平調で下がり目がなく、C型には下がり目がある。B型はそれ自体が低くなるが、積極的な「低」を実現する点でC型と共通する。そのため、A型を無核型、B型とC型を有核型と考える。前部要素がB型の場合は常に複合語アクセントがB型(B+X型)になることから、B型は頭位に核を有し、C型は末位に核を有すると考える。A+C → Bなど、構成要素にB型がない場合にもB型になることから、N+N' → 'N-Nのような核の移動を考える⁶。複合語では核を頭位に引き寄せる傾向があることになる。

複合語のように全体が長くなるとB型が現れやすいことは、上野(2014)の外来語アクセントからも認められ、概ね3モーラ以下はC型、4モーラ以上はB型で現れる(上野2014: 75)。複合語の場合も全体が4モーラ以上になるとB型で出る傾向があり、特に前部要素が3モーラ以上の場合にはほぼB型になる(例: biNga=《男》, biNga'agami_《男の子》)⁷。

6. まとめと課題

本発表では与那国方言のアクセント体系について、複合語を中心に整理した。2単位形に基づき、「空の」アクセントX型を認めると体系的に記述できることを示した。また、A+A以外の組み合わせでは複合語全体がB型になる傾向があることから、B型とC型を有核型、A型を無核型と分析できることを示した。

uNt'i]kudi]kami]《芋屑甕》のように、与那国方言の複合語では3単位形があり得る(上野2015)。多単位形がどこまで可能かについては今後の課題である。また、助詞bagai《ばかり》はC型のアクセントを有するようだが、C型名詞に続く場合は2単位形にならない(iju(=)bagai]《魚ばかり》, mami_bagai]《豆ばかり》, sat'abagai]《砂糖ばかり》^xsat'a]bagai], ^xsat'a]bagai)。このような助詞のアクセントについての分析も今後の課題である。

記号一覧

/o/: oから高い。 /o'/: oの後から低い。 /o/: oから低い。 /-/: 形態素境界。 /+/: アクセント単位の境界。

参考文献

- 上野善道(2010a)「琉球与那国方言のアクセント資料(1)」『琉球の方言』34: 1-30。
——(2010b)「与那国方言のアクセントと世代間変化」『日本語研究の12章』: 504-516。
——(2011)「与那国方言動詞活用形のアクセント資料(2)」『国立国語研究所論集』2: 135-164。
——(2014)「琉球与那国方言のアクセント資料(3)」『琉球の方言』38: 69-92。
——(2015)「琉球与那国方言体言のアクセント資料(4)」『琉球の方言』39: 165-193。
ペラール, トマ(2013)「日本列島の言語の多様性—琉球諸語を中心に—」『琉球列島の言語と文化—その記録と継承』: 59-67。
平山輝男・中本正智(1964)『琉球与那国方言の研究』東京: 東京堂。220pp。
ローレンス, ウェイン(2008)「与那国方言の系統的位位置」『琉球の方言』32: 59-67。

⁶ 核が保存すると仮定する場合、A+C→Bは(α)A+C型から(β)A+X型(A型)の段階を経ずに直接(γ)B+X型(B型)になったことになる。

⁷ 上野(2011)の報告する動詞の活用におけるB型とC型の複雑な交替も、概ね語幹の長さに基づいて整理できると思われる。特にB型で一貫するのは複合動詞由来のような語幹の長いものに限られる。